

わたしがきつかけになれたら

ヴァイオリニスト

杉浦^{すぎうら}愛佳^{あいか}

碧南市出身。名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部を卒業。多数のコンクールで受賞し、現在は高嶋ちさ子が率いる「12人のヴァイオリニスト」のメンバー。4月5日の市制75周年記念コンサートでピアニスト奥谷翔さんと演奏した。



毎日が練習の日々 遊んだ記憶は元氣ツスーだけ

両親とも音楽に関わる仕事はしていなかったのですが、私が四歳の頃、オーケストラのヴァイオリンをテレビで見ると「この楽器、私も弾いてみたい！」と興味を持ったのをきっかけに、母が習わせてくれました。

小学生のときは、学校から帰ると母がヴァイオリンを準備して待っていて、毎日の練習に付き合ってくれました。最初は全く楽譜が読めなかった私に、時には怒り、時には褒めて、根気よく付き合ってくれて、二人三脚で頑張ってきました。

そうやって毎日練習を続けていた私にとっては、年に一回遊べる元氣ツスー！へきさんが楽しみで楽しみで仕方がなかった記憶があります。他の子は遊んでいるのに、どうして私だけ泣いて困らせたこともありました。その時母に「自分自身のために今やるべきことをやろうね。きっと将来愛佳のためになるから。」と言われ、泣く泣く練習しました。



今思えば、あの頃母に言われて毎日練習したから今があると思います。泣いた思い出も、今では笑い話に変わりました。

何事も積極的に挑戦！

音楽の世界に限らず、プロとしてアピールするためには自分の個性をどんどん出していくことが必要です。そのためには「自分がこうだ」と思ったことは何事もまずやってみることがとても大切です。特に子どもたちには、やらずに後悔するよりも失敗を恐れずに色んなことに挑戦して実際に体験して欲しいなと思います。

何かにつまずいたとき、もしあの時〇〇だったらって考えてしまうこともあります。どの時間、どの選択が自分の将来にとって良いことにつながるかなんて分かるのはずっと先です。だからこそ自分自身で選んで、その選択に対して覚悟をすることが一番大切だと私は思います。

私は、中学校の文化祭でドレスを

着て、舞台上でヴァイオリンを演奏しました。その当時は少し恥ずかしかったですが、今思えば将来の進むべき道への覚悟を決めた分岐点だったと思います。

その甲斐あって現在は12人のヴァイオリニストのメンバーになることができ、12人のヴァイオリニストコンサートでは、気軽に足を運んで楽しんでいただくためにも自分の殻を破って、ヴァイオリンを使っている一芸をしている私です（笑）。

ヴァイオリンの魅力

嫌になる時もありましたが、それでもずっと続けてこられたのは、ヴァイオリンが一番好きだったからだと思います。子どもの頃に、バレエなど他にも習い事はたくさんしていましたが、その中で自分自身が選んだのがヴァイオリンでした。音色も人の声に近く、喜びや悲しみの感情を様々な音色で表現できるところが魅力ですね。

また、ヴァイオリンはどこにでも持参し弾けるところも魅力の一つです。母校である柵尾小学校の入学式では、子どもたちの間を歩きながら「となりのトトロ」などを演奏しました。舞台から下りて子どもたちの顔を見ながら演奏するのは楽しかったですし、子どもたちが笑顔で拍手してくれたのが何よりうれしかったです。

習い事を選択肢に

私がヴァイオリンを始めた時に、碧南には教室がなく、母は探すのに大変苦労したそうです。周りの方にも聞くと、せっかくなやってみてほしいのか、どこで楽器をそろえればいいのか、どこに先生がいるのかなど、いろいろな理由で諦めることが多いようです。ピアノと比べると報がとて少ないので、その不安を補うために苦労した私自身が手助けとなって、ヴァイオリンが身近な習い事を選択肢に感じてもらえるように活動して行きたいです。

最近では、結婚式での披露宴やお祝いの席で一曲演奏したいなどの理由で、趣味として大人の方が始めることも増えてきているんですよ。そういう方々のために、演奏活動とともに碧南で講師も行っていきたくて思っています。そしてもっともっとヴァイオリン人口を増やしたいです！



△柵尾小学校の入学式での様子